

山と博物館

第32巻 第3号

1987年3月25日

大町山岳博物館



鹿島槍頂上の慎太郎さん(左)と横先生 (S22、県信君撮影、百瀬美江さん所蔵)

大町の横有恒先生

この度、日本の近代登山の育ての親である横有恒先生が親しく使われた用具をはじめ、登山で活躍された方たちの貴重な資料三八点が、日本山岳会のご好意により、大町山岳博物館へ寄託された。

登山の業績に加えて、すぐれたお人柄が高く評価され文化功労者に選ばれ、また勲三等旭日章の叙勲など登山家として最高の栄誉を得られた横先生が、僅かな期間ではあったが大町に住まわれ深いご縁につながった。大町の先生に触れてみたい。

少年時代から山に惹かれ、アイガー東山稜初登攀に結実する卓抜した登山活動をしてこられたが、第二次世界大戦により活動は中断され、南洋拓殖株式会社の仕事に出すことになった。長い戦争が続いたが、ようやく終結した翌月早々、米軍により日本政府の侵略政策に協力したということを追放処分をうけられる。終戦間際の横浜の空襲で、家や家財や大切にしていた蔵書など一切を失ってしまい、僅かな手提荷物で軽井沢に移り、半年で大町に移った。年来の山友たちである百瀬慎太郎さんの親切により、常盤山崎の屋号で降旗造酒衛さん宅の離れ屋を借り、奥様、ご子息と三人の生活が始まった。

「追放というレッテルは私の身分に決定的な変化を齎らし、私の前に何処も門戸は閉ざされた。ただ大町の人々は私たち一家を温く迎え入れてくれた。」(『わたしの山旅』岩波書店)

傷心の時ではあったが、対山館に慎太郎さんを訪ね配給の酒を酌み、木崎湖に釣糸を垂れ、うづきが薄紅に咲いて美しい八方尾根に蕨を採り、魚籠を腰に高瀬川原に初茸を探すなど、太陽や星や雨や風を身近にしたご一家安息の日々があった。また荒狂う吹雪の日、高瀬川の川原の深い雪をおかして、大町中学校(旧制)へ通うご子息を望遠鏡で眺めて氣遣われるご一家団欒のときでもあった。

二三年の晩夏、慎太郎さんと共に、大町堀六日町の青年・県信君を世話役に鹿島槍ヶ岳を登った。慎太郎さんと最初は最初で最後の山行であった。それから間もない一月、大町に別れ茅ヶ崎へ帰られたが、「君去ると聞けば高瀬の板橋をわがふむのちの寂しさを思ふ」と慎太郎さんは惜別の情を短歌に詠んだ。

鹿島槍登山の縁で、鹿島部落にあって登山者に親切を尽くして亡くなった狩野きく能さんの功績を称えて、先生の書かれた碑が五二年部落に建てられた。

今、九三才を迎えられお元気な先生に、いつまでもご健勝で当山岳博物館へも指導の玉言を頂けるようお願いしあげ、終りに日本山岳会の資料の寄託にお骨折りを頂いた松田雄一様、中村純二様、平柳一郎様はじめ関係会員の皆様深く謝意を表します。

(大町山岳博物館嘱託員 丸山 彰)

山岳博物館の 新着寄託資料と展示替え

新たに寄託された資料

〔日本山岳会の寄託品 三八点〕
チベット経典文 深田久彌旧蔵
ロンブクよりエベレスト 1924 (版画)
一九二四年 イギリスの第三次エベレスト
隊に参加したH・ソマベルの作
川口慧海肖像(額入写真)
明治三〇年代から大正にかけて二回のチベ
ット行を果した慧海の昭和五年の肖像
ヘスラー・ピッケル
上田哲農使用のスイス産ピッケル 昭和初
期の作と思われる
シエンク・ピッケル
板倉勝宣使用 横有恒旧蔵のスイス産ピッ
ケル 大正一一年頃の入手と思われる



展示したマナスル資料の一部

宮野典夫 峯村隆

アッシュエンブリンナー型ピッケル
三枝守博(威之助)使用のピッケル
門田・ピッケル
門田直馬・茂の昭和九年頃の作 上田しの
ぶ(哲農夫人)使用
山内・ピッケル(五七一号)
山内東一郎の昭和一〇年頃の作 小谷部全
助使用

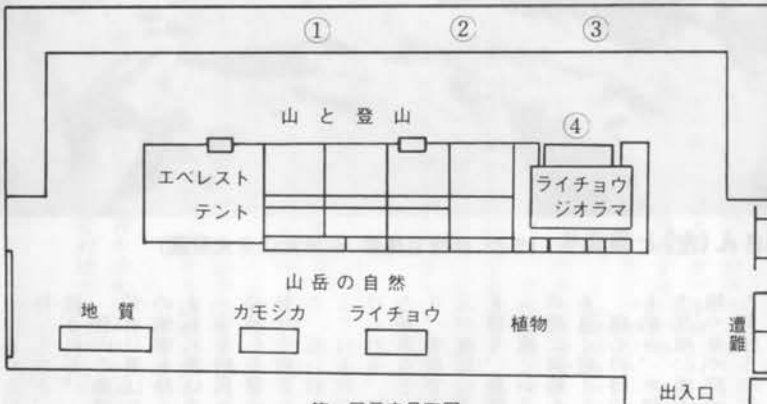
門田・ピッケル頭部 昭和初期の試作
門田一号アイゼン 和久田弘一旧蔵
秩父宮様肖像(額入写真)二点
横有恒肖像(額入写真)四点
横有恒のアイガー・東山稜登攀関係資料
佐藤久一朗旧蔵のチョッキ・毛糸の靴下・
パイプの三点

マナスル登山関係資料 一二点
横有恒使用のリュックサック・田口二郎の
装備五点・辰沼広吉の装備四点・今西寿雄
の防寒帽・マナスルで使用と思われる飯盒
スキー板など四点
輪かんじき 芦峠寺のガイド佐伯利雄の作
ナンダコート、エベレスト写真 各一点

平柳一郎氏の寄託品 ピッケル四点
山内一八二六号 昭和二十七年の作
シエンク 初代シエンクの大正十年前後の作
ウイリッシュ 初代の大正一三年頃の作
フブアウフ 明治末から大正初期の作
三点はいずれもスイス産ピッケル

第一展示室の展示資料の追加

第一展示室は、ライチョウやカモシカの生
態などを紹介する『山岳の自然』と、登山の
歴史を中心に紹介する『山と登山』の二つの
テーマで構成されています。
今回は、このうち『山と登山』のコーナー
に、新着の寄託資料と博物館の収蔵資料をい
くつか追加展示しました。
左は第一展示室の見取図で、番号は追加し
た資料とそのコーナーのおよその位置を示し
ます。以下の章題の番号と対応しますので目
安にしてください。



第一展示室見取図



宮様登山写真パネル

一、近代登山の発展コーナー
大正二年、陸地測量部の五万分の一地図は
北アルプスのほとんどの部分が発売され、こ
の頃から登山の大衆化が始まったといわれま
すが、同じ時期からの宮様の北アルプス登山
もこの大衆化と因果があると思われる。
新設の写真パネルは、大正九年の常念附近
の朝香宮様、大正六年の白馬山頂の東久邇宮
様、大正一五年、ヨーロッパアルプスで松方
三郎、松本重治と肩をくむ秩父宮様(横有恒
撮影)の三枚で構成されています。前二点は
大正から昭和初期に山岳写真家として活躍し
た大町出身の手塚順一郎が随行し撮影した写
真のアルバム(寄託資料、このパネルの前に
展示)、他は日本山岳会(以下JACと呼び
ます)の寄託写真が元になっています。
この他に、大正から昭和初期に大町口、有
明口の山案内人として活躍した大和由松のス
キーシール、同じく昭和初期からの大町口の
案内人平林高吉のワラジ、学術、教育ばかり
でなく登山の普及にも活躍した河野鶴蔵の名
刺や矢沢米三郎と共著の『日本アルプス登山
案内』も追加展示しました。



板倉勝宣のピッケルなど

二、登山の全盛期コーナー
大正八年三月、積雪期の槍・穂高連峰への挑戦の幕明けとなった槍ヶ岳偵察、大正一一年一月の北海道の最高峰旭岳厳冬期初登頂、同年七月、松方三郎らとの北鎌尾根からの槍ヶ岳登攀、八月の鹿子木員信、横有恒らとの湖沢での岩登り合宿など、板倉勝宣は日本の登山史上、雪と岩の時代のはじまりといえるこの時期に最先端を歩きました。
展示した板倉ピッケル(JAC寄託)は大正一一年頃の入手と思われる、大正一二年一月の横有恒、三田幸夫らとの立山スキー登山(松尾峠で遭難し板倉凍死)まで使用し、事後横有恒らが旧蔵したものです。
また、昭和初期、東京商大山岳部員として北岳パットレス、鹿島槍荒沢巖壁などのパリエーション・ルートを開拓した小谷部全助のピッケル、北大山岳部で活躍し、門田の製品を世に出した和久田弘一旧蔵の国産第一号の門田アイゼン(ともにJAC寄託)、藤木九三を中心に大正十三年発足したRCC(ロック・クライミング・クラブ)発起人のひとり直木重一郎の写真アルバム二点も新たに展示

三、日本人の海外登山コーナー
大正一〇年(一九二二)九月、横有恒はヨーロッパアルプスのアイガー・東山稜の初登攀に成功しました。この成果は、単に日本人の世界的活躍というばかりでなく、ヨーロッパアルプスの登山史上からも、ピトンや楔を使った人工登攀の記録として評価されており、帰国後、氏の伝えた本格的な技術と経験によって日本の登山界は新しいアルプス的登山へと大きく脱皮したといわれます。
展示した革のチョッキ、靴下、パイプの三点はこの登攀に使用し、同じ慶大山岳部OBの佐藤久一郎が旧蔵したもので、このうちチョッキとパイプは後のアルパータ、マナスル遠征にも使われました。これらの資料の上に新設した写真パネルで左下の写真は、同行したガイド、ブラバンドらとのアイガー下山後の記念写真(松方三郎旧蔵)、右下は後述の第三次マナスル遠征において隊長をつとめた時の写真です。(以上の資料はいずれもJAC寄託)



横有恒のアイガー資料

しました。これは大正九年頃の白馬登山の際に撮影した写真を紀行的に収めたアルバムで当時の風俗を知るうえでも貴重な資料です。



ピッケルコーナー

日本初のヒマラヤ遠征は、昭和一一年の立大ナンドコート隊です。精鋭の大学山岳部などはこれを契機に一勢にヒマラヤを想定した訓練に励みます。しかし太平洋戦争へと突き進む時局に遠征を実現した団体はありませんでした。その意味で、我国初の八千メートル峰挑戦でもあるJACのヒマラヤ・マナスル(八一五六M)初登頂は、ポスト・ナンドコートの日本登山界の悲願だったといえます。
昭和二七年に偵察隊を送り、二八年に初登を試み七五〇M地点で退却。翌二九年再挙して二次隊を派遣しましたが、マナスル山麓民の登山阻止という思いもよらないトラブルで計画放棄に迫られました。しかしJACは昭和三一年、さらに三次隊を派遣、ついにその頂点を極めました。
今回展示したマナスル資料は、山口二郎が一次隊で使用したアイゼン、辰沼広吉が三次隊で使用したと思われる皮手袋、オーバミトン、内靴、頂上を踏んだ今西寿雄使用の防寒帽、三次隊隊長、横有恒使用のリュックサックの六点(JAC寄託)です。

このコーナーには他に、昭和三九年の長野県山岳連盟隊のヒマラヤ・ギャチュンカン登山と、読売新聞社の協力で、昭和五十年の女子エベレスト隊の写真パネルを新設しました。
四、ピッケルコーナー
この新設コーナーは、背負具とつえ、コーナーの次に位置します。登山に使う杖類はさまざまですが、ここでは登山のためだけに洗練された専用具としてピッケルをとりあげ、次のような一八本を展示しました。
エルク(スイス) フリッツ・エルク作 明治四三年 加賀正太郎がユングフラウで使用 現存する最古の伝来品とされる
フブアウフ シェンク ウイリツシュ
平柳氏寄託 フブアウフは先のエルクに次いで古い伝来ピッケルとされる
ヘスラー JAC寄託
アックス JAC寄託 周布光兼旧蔵
本来は船大工用と思われる一八世紀頃の作
ピッケルの原型といわれる貴重な資料
山内作 一一三七号 一八二六号
前者は清水栄一氏寄託、後者は昭和二七年皇太子殿下へ献上のため特別に鍛えた二本のうちの一本で平柳氏の寄託
門田作 JAC寄託二本と館蔵一本
模作ピッケル JAC寄託の高頭仁兵衛、鹿子木員信、三枝守博のピッケルなど五点
シャルレ シモン (フランス)各一点
おわりに
今回の「山と登山」コーナーの資料追加にあたり、日本山岳会の中村純二先生、平柳一郎先生に直接ご指導を賜りました。紙上をかりてお礼申し上げます。
—記述参考—新橋・日本登山史 山崎安治

ツクの六点(JAC寄託)です。
このコーナーには他に、昭和三九年の長野県山岳連盟隊のヒマラヤ・ギャチュンカン登山と、読売新聞社の協力で、昭和五十年の女子エベレスト隊の写真パネルを新設しました。
四、ピッケルコーナー
この新設コーナーは、背負具とつえ、コーナーの次に位置します。登山に使う杖類はさまざまですが、ここでは登山のためだけに洗練された専用具としてピッケルをとりあげ、次のような一八本を展示しました。
エルク(スイス) フリッツ・エルク作 明治四三年 加賀正太郎がユングフラウで使用 現存する最古の伝来品とされる
フブアウフ シェンク ウイリツシュ
平柳氏寄託 フブアウフは先のエルクに次いで古い伝来ピッケルとされる
ヘスラー JAC寄託
アックス JAC寄託 周布光兼旧蔵
本来は船大工用と思われる一八世紀頃の作
ピッケルの原型といわれる貴重な資料
山内作 一一三七号 一八二六号
前者は清水栄一氏寄託、後者は昭和二七年皇太子殿下へ献上のため特別に鍛えた二本のうちの一本で平柳氏の寄託
門田作 JAC寄託二本と館蔵一本
模作ピッケル JAC寄託の高頭仁兵衛、鹿子木員信、三枝守博のピッケルなど五点
シャルレ シモン (フランス)各一点
おわりに
今回の「山と登山」コーナーの資料追加にあたり、日本山岳会の中村純二先生、平柳一郎先生に直接ご指導を賜りました。紙上をかりてお礼申し上げます。
—記述参考—新橋・日本登山史 山崎安治

第二展示室の展示替え

二階の第二展示室は北アルプス山麓の自然、歴史、民俗を紹介しています。民俗コーナーは稲作と仁科三湖の魚労を主にした構成でしたが、今回の展示替えて、スキーや雪の民俗をとりあげ、雪と人々とのかわりを紹介し、季節にあつた内容となりました。この展示は冬期間のものであり、六月からは再び農耕と魚労の民俗の展示となります。

スキーの民俗

スキーは近代人に取り上げられる以前から北極を取り囲む広い地域で用いられていました。特に北欧では紀元前からスキーに関する資料がみられます。ヨーロッパの古代、民俗



スキーの民俗



雪の中の遊び

スキーのコーナーではスカンジナビア地方の古代スキー発見の分布を示し、古代スキーの複製品が展示されていて、縮具の構造や足のせる部分の違いがわかります。

太古からのスキーも十九世紀の末期までは原始的な服物の延長でしたが、極地探検家たちがスキーを用いて快挙をなしてからはスキーは急にその効用を認められヨーロッパはもとより、世界の各地へ進出しました。日本へ近代スキーが輸入されたのは明治の後半です。ところがいづれも個人的な試乗で、一般的な普及にまでは至りませんでした。明治四十四年オーストリアのレルヒ少佐が新潟県高田師団にスキーを持ち込み、師団はスキー研究と講習を行いスキー普及の基礎を固めました。日本のスキーコーナーでは大正時代の輸出品や国産品の古いスキーを展示してあります。

雪の中の遊び

雪の中の遊びはたくさんありますが、そりやスキーはいずれも手作りです。特にそりは大きさや舵などの仕組に工夫をこらしたもので競いました。このコーナーでは下駄スケート、

手作りそり、竹スケート、竹スキーを展示してあります。

雪の民俗

大町北部から北安曇郡小谷村にかけては降雪量の多い地域です。農業や林業が中心であった時代には雪と人々の生活は密接でした。このコーナーではその当時のさまざまな雪具が展示されています。

現在では生業も変わり、生活様式も著しく変化してきましたので、これらはあまり目にすることができなくなってきた用具です。

雪踏み、屋根の雪おろし、狩猟、冬の山仕事などの支度には、ワラ靴(ゴソソ、スッベソ、スッベソ)をはき、カンジキやスカリを付け、ミノやスゲガサ(サメガサ)を身に付けました。そのほかに臙を保護するハバキ、足首の保温に使用したアツケアテ、ワラジとツマガケと一緒に使ったシツペゾ(カサカケワラジ、スッポワラジ)、ゾウリにツマガケをつけたコンゴ(ゴソソ)、ワラ手袋、ゾウリなどのワラ製品を展示してあります。同じ用途の製品でも作り方の違いがみられ、地域によって名称が異なっています。(①は大町地方、②は小谷地方)

雪上運搬具として、一本ぞり、二本ぞり、竹ぞりを展示室中央の台に陳列してあります。一本ぞりは小谷地方で急な坂を米俵や材木を積んで巧みな操作で滑りおろる用具です。二本ぞりは最も一般的で、各地で使用され利用価値も高いものでした。竹ぞりは細い竹をならべた構造です。

雪の民俗の展示では青木治先生の御指導をいただき、大町市と小谷村地方の資料を中心に取り扱いました。

(大町山岳博物館職員)



雪の民俗

山と博物館第32巻第3号
発行所 長野県大町市 一九八七年三月二十五日発行
TEL 220-211
印刷所 大町山岳博物館
長野県大町市市役所
大町山岳博物館
定価 年額一、〇〇円(送料共一切手不可)
郵便振替口座番号(長野四一)二二九九二